特別講座報告

早稲田みな子先生
「アメリカ日系社会の音楽文化」

山上千乃　愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

１．はじめに

2022 年度音楽学コースの特別講座では、国立音楽大学教授の早稲田みな子先生をお招きした。「アメリカ日系社会の音楽文化」という題目で、2023 年 2 月 9 日（木）15:00 ～ 16:30 に、愛知県立芸術大学芸術資料館演習室にて開催された。

早稲田みな子先生は音楽民族学を専門とし、主にアメリカ日系社会での音楽やアメリカでの日系人の音楽受容、変容などについて研究をなさっている。著書に、『アメリカ日系社会の音楽文化 — 越境者たちの百年史』（共和国、2022 年）や『日系文化を編み直す — 歴史・文化・接触』（共著、ミネルヴァ書房、2017 年）、『民族音楽学 12 の視点』（共著、音楽之友社、2016 年）などがある。

２. 講座の内容

講座では、早稲田先生のご著書『アメリカ日系社会の音楽文化 — 越境者たちの百年史』をベースに、その理論的枠組やアメリカで実際に演奏されている音楽など、映像や写真を豊富に交えながら示してくださった。

まず、“Asian American Music” という言葉の意味についてお話していただいた。これを直訳すると「アジア系アメリカ音楽」となるが、この言葉の指す特定の音楽様式は存在しない。「アジア系アメリカ音楽」という言葉は、その音楽のアジア系アメリカ的意味とコンテクストを理解するために使われるのである。つまり、音そのものではなく、音楽の持つ文化的な意味に注目する必要があるということだ。

この考え方をもとに、日系音楽の文化史やその考察などより深い内容へと入っていった。日系人の音楽文化の歴史は 1924 年までに移民した一世、一世を親とするアメリカ生まれの二世、ほとんどが太平洋戦争後に生まれた三世、

そして戦後に移民した新一世と分けられる。また、音楽文化は世代だけでなく、地域や周りの環境、戦中に収容所にいた経験の有無などによって異なる。しかしながら、世代を超えて継承されている文化もある。例えば、「ボン・ダンス」（盆踊り）は日本語の曲や英語の曲など様々なレパートリーを有し、現在でも仏教寺院の行事として楽しまれている。アメリカの仏教寺院の多くは浄土真宗であるが、浄土真宗は精霊の存在を否定しており、盆踊り本来の祖先の魂を迎え入れ供養するという考えとは結びつかない。アメリカの浄土真宗では、「ボン・ダンス」を祖先に感謝して踊るものとして独自の解釈をしている。ここに、文化形式と文化的内容の関係の変化が見られる。「ボン・ダンス」の形式は日本的であるが、その意味はアメリカという環境の中で付与された、ということである。

このような日本文化を広めるものとして、「二世ウィーク Nisei Week」というロサンゼルスの日本人街「リトルトーキョー」で行われる祭りがある。これは 1934 年に始まったものであるが、戦後は特にアメリカ社会へと開かれた祭りとなった。ここでは「ストリート音頭」というプレゼンテーション型の盆踊りが踊られる。これは、日系の歴史や文化の理解、他民族との交流、友好関係の促進などを目指している。

日系人の音楽文化の歴史は、太平洋戦争中の日系人強制収容所において最も活性化した。被収容者にとってもアメリカ当局にとっても、収容所での楽しみや活気をもたらすものとして音楽を必要としていたからである。一世や二世は収容体験を語りたがらなかったが、日系の歴史に向き合うようになった三世によって後世に伝えられていく。このような収容体験があったからこそ、戦後の「二世ウィーク」がアメリカ社会へと開かれたものになったのである。

3. おわりに

アメリカ日系社会の音楽文化には、様々な国や地域、民族の文化の要素の融合が見られた。また、日系人としてのアイデンティティや存在意義を主張し、日系の歴史や文化の理解促進を求める姿が感じられた。これらを通して筆者は、この先グローバル化がさらに進む中で、アメリカ日系社会の音楽文化がどのように発展していくのか、興味を持った。